

有識者ダイアログ

目標ごとに詳細な記載があり、
透明性や誠実性を感じます

すべてのマテリアリティに真摯な姿勢で取り組んでいて、好感を持っています。目標ごとに実績や主な取り組みについて、詳細な記載があり、透明性や誠実性を感じます。今後は、取り組みがまだ十分でない内容についても、方針や計画などを開示することで、さらに情報開示が拡充されることを期待しています。また、様々な施策の苦労話や裏話も紹介してはいかがでしょうか。例えば、「食の安全・安心」では、国際基準に加えて独自の基準を設定しようとしています。先進的な取り組みだけに、試行錯誤した点なども、積極的に伝えてほしいです。「従業員の能力発揮」の女性活躍では、風土改革が遅れていたと自己反省を開示しています。真摯に取り組んでいるからこそその気づきだと思います。他社の参考にもなり、社会全体への波及も期待できます。

「持続可能な調達」では、フェアカカオプロジェクトを進められています。カカオ豆は熱帯性の植物で、生産地の多くは発展途上国や最貧国で、世界中の消費者や人権団体が注目している領域です。買い付け元など、一歩踏み込んだ情報を開示することで、活動の説得力が増すと思います。



赤羽 真紀子氏

CSRアジア株式会社
日本代表

経歴：早稲田大学で政治学と生物学を修める。様々な業種の多国籍企業のCSR担当として通算10年以上の経験を有し、スターバックスコーヒージャパン(株)、(株)セールスフォース・ドットコム、日興アセットマネジメント(株)の各社で関連部署の立ち上げを手がける。2010年より現職

リコールの情報や内部通報などについても、開示している点が評価できます

2018年からダイアログに参加していますが、活動が年々充実してきていると感じています。サステナビリティレポートの情報も透明性が高まっており、リコールの情報や内部通報などについても、開示している点が評価できます。

「食と健康」の中で、食育に力を入れていくのは良いことだと思います。現在は、小学校の社会科見学を中心に受け入れられていると聞いていますが、児童養護施設やひとり親家庭など福祉の視点も取り入れて、学びの機会をさらに多くの子どもたちに広げてほしいです。加えて、食育を通じて様々なことを伝えられると思います。例えば、賞味期限に関する正しい知識を伝えることは、食品ロスの削減にもつながります。また、カカオ豆の栽培からチョコレートの製造までの工程について伝えることができれば、子どもたちが社会や世界に目を向けるきっかけを提供できると思います。

「環境」について、再生可能エネルギーの積極的な活用については、素晴らしいと思いました。欧州の事例には、食品廃棄物をオフィスの電気など、再生可能エネルギーにリサイクルし、資源として活用しているケースもあります。これからも一層の取り組みを期待しています。



井出 留美氏

ジャーナリスト、食品ロス問題専門家
第2回食生活ジャーナリスト大賞
(食文化部門)受賞者

経歴：奈良女子大学食物学科卒、博士(栄養学 女子栄養大学大学院)、修士(農学 東京大学大学院農学生命科学研究科)。ライオン(株)、青年海外協力隊を経て日本ケロッグ広報室長等歴任。東日本大震災の際に、食料支援で食料廃棄に憤りを覚え、誕生日を冠した(株)office 3.11設立。日本初のフードバンクの広報を委託され、PRアワードグランプリソーシャルコミュニケーション部門最優秀賞へと導く。著書に『賞味期限のウソ 食品ロスはなぜ生まれるのか』、『あるものでまかなう生活』など

(株)ロッテでは、2018年より外部有識者の方をお招きし、ダイアログを実施しています。ダイアログでは、サステナビリティへの取り組みについて忌憚のないご意見や今後に向けたアドバイスをいただき、活動に反映しています。2020年は新型コロナウイルス感染拡大を防止するため、オンラインにて実施しました。

正しい情報を、様々な場面で 発信していくことが重要だと思います

ダイアログの参加は3回目ですが、サステナビリティ活動は確実に進んでいると思います。「食の安全・安心」については、従来から高い水準で取り組まれている印象です。FSSC22000は、十分に質の高い認証ですが、さらにLOTTE ADVANCEを導入して、品質向上を図る姿勢が素晴らしいと思います。システムを取り入れるだけでなく、それが運用・確認できる体制を目指していることも、評価できます。

食は消費者の関心が最も高い分野の1つですが、科学的根拠に基づかない情報も多く出回っている状況です。日頃のコミュニケーションや食育活動、工場見学などを通じて、正しい情報を発信していくことは重要だと思います。特に、機能性表示食品については、品質保証をしっかりと行った上で、消費者の誤解を生まないような発信を引き続き意識してほしいと思います。

また、食品ロスも近年急速に関心が高まっていますが、業界の構造的な課題もあり、難しいテーマです。また、フードバンクなどの活動も以前よりは活発になっていますが、ボランティアが中心で体制はまだ十分とは言えません。事業者や行政がもっと協力して取り組んでほしいと思います。



浦郷 由季氏

一般社団法人全国消費者団体連絡会*
事務局長

経歴：大学卒業後、7年間の会社勤めの後、専業主婦として子育てをしながら生協の活動に関わる。生活協同組合ユーコープ、日本生活協同組合連合会の理事を経て、2017年5月より現職。厚生労働省、食品安全委員会、消費者庁、消費者委員会などの審議会等委員を務める（* 消費者団体の全国的な連絡組織で、くらしに関わる様々なテーマについて、審議会への委員参加やパブリックコメントの提出などを通じて消費者の立場から意見発信をしている）

事業活動とSDGsの各ゴールを結び付け、 しっかりと発信することが重要です

マテリアリティマップや3つのステップ、ESG中期目標は、非常に分かりやすいです。それぞれのマテリアリティに、貢献するSDGsが特定されていますが、実際にはより複合的に、様々なゴールに貢献していると思います。例えば、「持続可能な調達」は、貧困の解決や教育の普及にも貢献していないか、掘り下げて考えてみることもできると思います。

企業がSDGsの達成に貢献していく上で重要なのは、事業活動とSDGsの各ゴールを結び付け、しっかりと発信することです。例えば、チョコレートを食べることで国際NGOを通してカカオの産地を支援できるなど、製品がある社会課題の解決に貢献しているかどうかは、消費者の購買行動にも影響を与えます。特に、若い世代は、東日本大震災や新型コロナウイルス感染症の蔓延を経験して、社会の連帯感や助け合いの重要性を感じている人が多く、エシカル消費もますます増えると思います。

また、アフターコロナという言葉が注目を集めています。感染拡大防止のために行っている在宅勤務やWEB会議などを、収束後に新しい働き方として定着させ、労働生産性の向上につなげられることを期待しています。



蟹江 憲史氏

慶應義塾大学大学院
政策・メディア研究科 教授

経歴：慶應義塾大学大学院 政策・メディア研究科後期博士課程修了。博士（政策・メディア）。北九州市立大学助教授、東京工業大学大学院 社会理工学研究科准教授を経て、2015年より現職。2013年度からは、環境省環境研究総合推進費戦略研究プロジェクトS-11（持続可能な開発目標とガバナンスに関する総合的研究プロジェクト）プロジェクトリーダーを3年間務めた。2014年より国連大学サステナビリティ高等研究所シニアリサーチフェロー、2020年より同非常勤教授を務める

有識者ダイアログ

競争力向上のための取り組みは、
もっと開示を充実させるべきです

マテリアリティやESG中期目標を拝見して、全体的に真っ当で、重要なポイントも押さえられていると思います。マテリアリティ策定にあたって、しっかりとガイドラインを使用している評価できます。

企業は価値を創造して、評価されて、発展していく存在です。そのためサステナビリティ活動は、網羅性、マテリアリティ、競争力の3つが重要だと考えています。競争力向上のための取り組みは、もっと開示を充実させるべきです。例えば、咀嚼についてです。ガムで創業した会社ならではの視点で、健康とのつながりも明らかになっていることから高齢化社会でも非常に注目されています。そのことをしっかりと訴求することで、従業員も強みであることに気づき、新たなアイデアも出しやすくなると思います。

「従業員の能力発揮」については、働きがいを感じている社員割合は決して高いとは言えません。強く活発な組織を作るためには、パーパスが重要だと考えています。従業員参加型でパーパスを策定するなど、一体感を持った上で、イノベーションの生まれやすい自己変革ができるような強い組織を目指してほしいです。



ピーター D. ピーダーセン氏

一般社団法人 NELIS 共同代表
大学院大学至善館教授

経歴：デンマーク生まれ。コペンハーゲン大学文化人類学部卒業。1984年から日本での活動を開始。2000年に(株)イースクエアを共同創業、代表取締役社長に就任。2011年同社共同創業者に。2014年からは(株)トランスエージェント内リーダーシップ・アカデミー TACL 代表に就任。2015年からは(一社)NELIS次世代リーダーのグローバル・ネットワークの共同代表に就任。2015年より現職。2019年より大学院大学至善館教授を務める

ダイアログを受けて

私たち自身の価値を見つめ直し、
取り組みや発信に活かすべきだと
再認識いたしました

ダイアログを通して、皆様から当社に対する強いご期待を感じ、改めて気持ちを引き締めてまいります。ご指摘いただきましたように、フレームワークや先行事例に学びながら取り組みを進めると、どうしてもロッチェらしさに欠けがちになってしまいます。やはり私たち自身の価値を見つめ直し、取り組みや発信に活かすべきだと再認識いたしました。特に「食と健康」は、私たちが大切にしてきたロッチェバリューを具現化するテーマであり、私たちにしかできない取り組みを加速させることで、皆様のご期待に応えられるよう努めてまいります。

また、新型コロナウイルス感染拡大はサステナビリティにも大きな影響を与えました。在宅勤務など新しい働き方が半ば強制的に始まり、一気にスタンダードとなる転換期となっています。このように世の中が不安定な状況下においても、私たちのお菓子やアイスクリームが皆様の心と身体の癒しに少しでも貢献できていると実感しています。これからも世の中から必要とされる会社でいられるよう、サステナビリティへの取り組みをさらに推進してまいります。



坂井 建一郎

株式会社ロッチェ
上席執行役員
経営戦略本部長